



MEDICAL OFFICE

医療の最前線からのワンポイントアドバイス

薬学部 教授

なかむらともしのり
中村智徳

「お薬手帳」はお持ちですか？ その重要性和将来性

医師や薬剤師に、「いま飲んでいる薬やサプリメントなどがありますか？」という質問をされることがあります。多くの人は医薬品名を正確に伝えることは難しいでしょう。しかし医薬品名が分からないと、新たに服用する薬との飲み合わせの良しあしや、重複投与がないかを確かめることができず、大変危険なことが起きかねません。もし「お薬手帳」を医師や薬剤師に見せてもらえれば、複数の医療機関を受診している患者の服薬履歴と処方せん薬とを見比べて、重複投与の有無、違う薬同士を服用した場合の相性(相互作用)をチェックできます。

また「お薬手帳」には、アレルギー歴や副作用歴を記載する欄が設けられており、もし患者自身や医療者による記載があれば、同一の成分や類似成分を含む薬の処方避けることができます。

さらに、緊急時にはカルテの代わりとしての威力も発揮します。もし何らかの疾患により外出先で意識を失っても、「お薬手帳」を携帯していれば、どのような疾患を持っているのかを予測することができます。応急処置に有用な情報を得ることができます。実際に東日本大震災の時には、病院や薬局が大きな被害を受け、カルテや薬歴を喪失してしまいました。が、救命処置や慢性疾患を持つ患者の処方で「お薬手帳」が大変役立つています。

この東日本大震災での教訓から、政府は「お薬手帳」の利用促進を強化していますが、さらに「どこでもMY病院」構想[※]という政策の中で、IT技術を利用した「電子版お薬手帳/カード」の開発と普及を急いでいます。「お薬手帳」がうまく普及しない理由として、「つい持参し忘れてしまう」「持ち歩くのは面倒」「なくす

と個人情報拡散の危険性がある」などが挙げられています。しかし近年、多くの国民がスマートフォンなどの電子機器を所有し、ほぼ常に持ち歩いている状況となっており、この電子機器に「お薬手帳」の機能を付加して活用できないか、さまざまな検証が行われています。また、「お薬手帳」を磁気カード化して、携行を容易にするとともに、各個人の診療データを大量に保存し、医療機関に持参する仕組みも構築しています。厚生労働省のロードマップでは、「電子版お薬手帳/カード」のサービス提供は一部の地域などで2013年からすでに始まっており、さらには最新のIT技術によるセキュリティ対策の強化により、いよいよ患者自身が自らのカルテを持って医療を受けられる時代が到来しようとしています。

※ 首相官邸ホームページ「どこでもMY病院」構想の素見についてで検索